

びわこの 考湖学

48

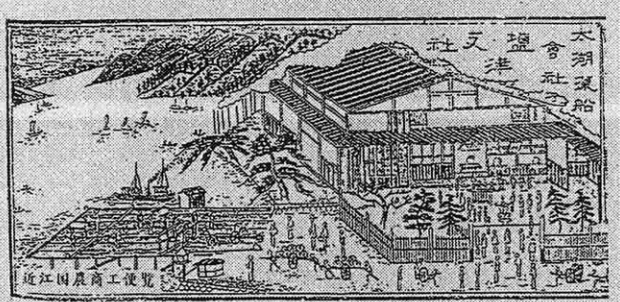
彦根藩の火薬庫跡は城の北約2kmの松原内湖のほとり、現在の「東北部琵琶湖流域下水道」の施設の中にあリました。平成13年から14年にかけて発掘調査が実施され、彦根藩が幕末の動乱期に軍備を近代化し、近代兵器に欠かせない火薬を大量に保有した様子が明らかになりました。

さて、その大量の火薬は、ほとんど使われないまま時代は明治となり、版籍奉還のち明治6(1873)年、新政府が伏見に置いた鎮台に移します。輸送は船でおこなったのですが、政府はそのさい琵琶湖の蒸気船の運航禁止や湖岸での焚火禁止を命令しています。1853年、ペリーが浦賀に現れ、初めて見た蒸気船に驚いてからわずか20年足らず、琵琶湖には火薬の輸送を脅かすほどの多くの蒸気船が往來する状況となっていました。

たのです。琵琶湖に最初に蒸気船を浮かべたのは大聖寺藩の藩士石川嶂です。蒸気船の優秀さに着目した石川は大津百艘船仲間の一庭啓示らとともに長崎で蒸気機関を購入。造船職人を雇い入れ、大津造船所で明治2(1869)年の2月、蒸気船「一番丸」を完成させています。それを就航させたのが日本有数の主要航路大津―塩津間です。

その性能は素晴らしく、明治4年に大津百艘船や各藩が占めていた琵琶湖湖上交通の特権が廃止されたことも後押しとなり、次々と新しい蒸気船が建造されました。塩津街道は今も建物などに

蒸気船



西浅井町の塩津港にあった往時の太湖汽船塩津支所を描いた絵図

港町らしい町並みをよく残しています。塩津浜の集落を通り過ぎますと琵琶湖に突き当たります。ここに、太湖汽船の船着き場が置かれていました。近世の船溜りは街道に並行する大坪川を少しさかのぼ

った所にあリましたが、大型蒸気船の発着場は新たに琵琶湖に直接面するところに設けられました。汽船の旧船着き場から100mほどの区間は街道の道幅が少し太くなっているのに気が付きます。また、そこから右に曲がると町並みには似合わない緩いカーブに出合います。正確な記録は見当たらないのですが、これは多い荷物をさばくため、街道沿いに一方通行のトロツコを設置し周回させた痕跡といわれています。その設置期間は短かったようですが、京都と北陸を結ぶ主要航路として栄えた塩津の港のにぎわいが蒸気船の時代を迎えて盛隆した様子を見ることが出来ます。

時代の流れは速く、明治13年神戸―大津間、明治17年長浜―敦賀、そして長浜―大垣間に鉄道が開通します。長浜―大津間は開通までに時間を要し、その間は蒸気船の連絡船で繋ぐことが計画されました。連絡船は民間業者に委託されることになり、そこで設立されたのが太湖汽船でした。大阪の実業家藤田伝次郎など資金信用力のある経営者らによって、琵琶湖に大型汽船を建造し長浜―大津間などに就航しました。今、長浜にその時の駅舎が資料館として残っています。

就航してまもない明治22年に、大津―長浜間の鉄道が開通します。連絡船航路はわずか7年余りで廃止となったのです。近代化の花形のように登場し、丸子船を「旧型船」にした蒸気船の時代はわずか20年余りだったのです。そのことは基幹輸送路として日本の物流を支えてきた琵琶湖航路をローカル航路へと変えていきます。

一方、丸子船は帆を下しエンジンで補強し、古典的形式を保ちながらも改良を施され、昭和の初めまで琵琶湖周辺地域の物資輸送にあたりました。

わずか20年の栄華

(滋賀県文化財保護協会 横田洋三)